

岐阜県立中津高校

キャリア教育

体系的な進路探究活動と ボランティア活動で、 主体的な学習集団を育成

変革のステップ

背景と課題

- 大学入試に向けた準備を始めるのが遅い生徒が多く、進路意識の涵養に課題があった

実践内容

- **弁論大会の改編** 1・2年次の弁論大会を、小論文指導を中心とした取り組みから、進路探究活動を中心とした取り組みへと改編。特に1年次には、生徒が「自分は何に興味があるのか」というテーマとじっくり向き合えるようにした
- **地域と連携し、ボランティア活動を推進** 生徒の視野を広げるため、旧中山道「馬籠宿」における通訳を始めとした、地域と連携して行う多様なボランティア活動を推進
- **保護者向け進路勉強会の実施** 年8～9回、保護者を招いた勉強会を実施し、大学入試や就職、校内の取り組みなどの情報を共有

成果と展望

- 「自分ならではの体験」を語れる生徒が増え、推薦・AO入試の合格率が向上
- 学校と生徒・保護者との信頼が深まった

岐阜県立中津高校は、創立100年を超える歴史を持つ学校だ。同県南東部に位置する東濃地区では唯一の単位制普通科高校として、地域の発展を牽引する人材の育成を目指している。毎年、生徒の約7割が4年制大学に進学し、進学実績が安定している反面、生徒の進路意識の育成には課題があった。大学入試に向けた準備を本格化させる時期が遅くなる傾向が見られ、3年次の夏季休業に入ってようやく腰を上げる生徒も少なくなかった。そこで、キャリア教育に力を入れようと考え、1・2年次のLHRや「総合的な学習の時間」を中心に、取り組

キャリア教育を充実させ、自分の将来像を描ける生徒の育成を図る

PROFILE



旧制・中津町立中津高等女学校として開校。「自由と個人の尊厳・思索と自己の完成」を校訓とし、主体性や社会性を備えた生徒の育成を目指している。2007年度の岐阜県立恵那北高校との統合を機に、単位制に移行した。

設立 1906（明治39）年

形態 全日制・定時制／普通科／共学

生徒数 1学年約200人

2017年度入試合格実績（現浪計） 国公立大は、東北大、千葉大、横浜国立大、富山大、信州大、岐阜大、静岡大、名古屋大、広島大、岐阜県立看護大などに64人が合格。私立大は、青山学院大、東京理科大、愛知学院大、南山大、立命館大などに延べ245人が合格。

住所 〒508-0001 岐阜県中津川市中津川1088-2

電話 0573-66-1361

Web site <http://school.gifu-net.ed.jp/nakatsu-hs/>

*プロフィールは2018年3月時点のものです

みを充実させることにした。教務主任の高橋俊和先生は、次のように語る。

「大学進学という人生の大きな岐路において、本当に進みたい道を選ぶためには、目的意識が欠かせません。そこで、生徒が進路の視野を広げながら、『大学で何を学びたいのか』『社会で何がしたいのか』をしっかりと考えられるよう、全校体制で指導を工夫していくことにしました。目標が固まれば、学習意欲の向上にもつながると考えました」

弁論大会の中軸を進路探究とし、生徒が好きなテーマを掘り下げる

キャリア教育を推進する中で、2つの柱が設



高橋俊和 たかはし・としかず
岐阜県立中津高校
教職歴32年。同校に赴任して9年目。教務主任。「生徒の心に火をつける支援」と

小栗和成 おぐり・かずしげ
岐阜県立中津高校
教職歴31年。同校に赴任して4年目。進路指導主事。「生徒自身の夢の実現を支援すること」と

喜多川博 きたがわ・ひろし
岐阜県立中津高校
教職歴17年。同校に赴任して5年目。1学年主任。「仕事に対しては『現状維持は失敗』、生徒に対しては『誠心誠意』の信念で臨む」と

西山敏伸 にしやま・としのぶ
岐阜県立中津高校
教職歴16年。同校に赴任して6年目。進路指導部。「仕事も授業も『明るく、楽しく、元気よく』。生徒との信頼関係の構築を大切に」

けられた。1つは、体験的な進路学習だ。1年次の夏季休業前には、主要な学問系統について広く学ぶための教師による学部学科説明会、夏季休業明けからは、地域企業の見学会や、大学・企業を訪問して学問系統別の講座を聞く秋季研修(図1)などを通して、進路への視野を広げる。2年次には、病院や市役所などへのインターンシップを中心に、実際に社会に出て体験する場を設けている。

もう1つは、1・2年次の弁論大会だ。同校の伝統的な取り組みであり、以前は、小論文のスキルの育成を目指し、論述・発表の指導に重点を置いていた。しかし、「興味のあるテーマが見つからない」と言う生徒も多く、思うような成果が得られていなかった。そこで、「生徒の進路への考えをいかに深めさせるか」という観点で内容を改編し、2016年度からは、各学年の進路探究活動の集大成と位置づけることにした。

各学年ともに、3学期の弁論大会本番に向け、2学期から準備を始める。1年次では、生徒一人ひとりがマインドマップを用いて、自分の関心のある分野を探る中でテーマを設定。それについて書籍やインターネットで調べ、弁論大会の原稿に用いる小論文のアウトラインを書く。自分の考えや主張を必ず盛り込むよう繰り返し伝え、調べた事実しか書かれていない場合は書き直すよう指導している。そして、冬季休業中に、1200〜1500字の小論文に取り組

図1 2017年度秋季研修テーマ一覧

講座名	研修場所	テーマ	参加人数(人)
文学	南山大学、愛知県図書館	文学研究とは何か・図書館とは何か	24
語学・国際	日本福祉大学	国際理解・国際協力について考える	17
経済・経営	南山大学、三菱東京UFJ銀行貨幣資料館	貨幣をキーワードに経済学の間口の広さを知る	19
教育・保育	岐阜聖徳学園大学	教育学・保育学の内容を知り、体験しよう	28
理学	南山大学理工学部	大学の数学を知る	5
工学	愛知工業大学、トヨタ産業技術記念館	中部圏のものづくりと大学の研究を知る	39
医療・看護	中部大学	医療と看護の分野とその実際について学ぶ	36
芸術	名古屋芸術大学	将来の職業を視野に、芸術系学部で学ぶことを知る	13
生活科学	中京学院大学	栄養・食品学について	4

生徒が興味のある分野について探究し、希望進路の実現への意欲と関心を高められるよう、事前学習3時間、事後学習1時間と、当日の1日を使って、学問系統別に研修している。*学校資料を基に編集部で作成

む。LHRで小論文指導を行っていることもあり、「書き方が分からない」と言う生徒は少ない。17年度1学年主任の喜多川博先生は、こう話す。「テーマは、できるだけ自分の進路にかかわる内容になるよう指導しています。探究する中で、『興味を持っていた分野なのに全く知識がないことが分かった』『調べ始めたら

意外と面白くなかった」と言う生徒もいました。学問を深める難しさを実感し、自分の適性を知るよい機会になっていると思います」

3学期には、書き上げた小論文を用いて弁論の練習が始まる。4人1組で発表し合い、率直な感想や意見を述べ合う。そのアドバイスを基に、発表の仕方や内容などを修正した上で、各クラスで発表会を開く。内容、構成の分かりやすさ、主張の明確さ、発表の態度の4観点について、各5段階で生徒が相互評価し、感想も書き添える。そうして各クラスから代表者を1人ずつ選拔し、学年で弁論大会を行う(写真1)。17年度1年生では、命の大切さをテーマにした生徒が最優秀者となった。命への真摯な思い、身振り手振りを交えた巧みな語り口に心を打た

写真1 1年生のクラス代表者が、「最小限主義という生き方」「体育の意味」「日本の農業の課題」「不滅の意見」といった様々なテーマで発表。黒板を使って説明したり、プロジェクターで写真や絵画を示したりと、自分の考えを分かりやすく発表しようとする工夫が見られた。

れ、目頭を押さえる教師や生徒も少なくなかったという。生徒の感想にも、「自分の主張がいかに底の浅いものであるかに気づいた」「2年次では、もっと自分の考えを盛り込みたい」といった感想が多く、クラス代表者の発表に大きな刺激を受けていることがうかがえたという。

2年次は、基本的に1年次と同じ流れで進むが、準備期間でさらに探究を深めるために、クラス横断で学問分野ごとに10〜12のゼミに分かれ、小論文の作成に取り組み。1年次と同じテーマにしても、変えても構わない。担任と副担任が、自身の担当教科に近い分野のゼミの顧問として指導に当たる。

小論文にゼミ形式で取り組むようになってから、11月に行う大学教員を講師として招く出前講義への生徒の興味が高まっているという。進路指導主事の小栗和成先生は、次のように話す。

「生徒は、講師が語る研究の方法や発見の喜びなどを、現在の自分の探究活動と重ね合わせ、実感を伴って聞けるようになったのだと思います。各教育活動が互いに影響し合い、相乗効果が生まれることによって、生徒の気づきや学びが深まっていくのだと、改めて実感しました」

地域と連携したボランティア活動を推進し、生徒の視野を広げる

生徒のキャリア形成の機会として、地域とのつながりを生かしたボランティア活動も重視し

ている。そのきっかけは、生徒が青年会議所の協力の下に行った、学校祭や街頭での献血の啓発活動だった。それ以降、中津川市役所や商工会議所、法人会、中京学院大学との連携も進め、JR中津川駅前で行われる定期市「六斎市」で販売する商品を開発したり、吹奏楽部やギターマンドリン部による演奏会を開いたり、様々な取り組みが実現していった。

15年度からは、同校が拠点校を務める「岐阜県英語教育イノベーション戦略事業」の一環として、同市の観光名所の1つである旧中山道の宿場町「馬籠宿」でのボランティア活動を行っている。年3〜4回、外国人観光客に対して、生徒が通訳をしたり、道案内をしたりするほか、商店から依頼を受け、商品を広告するチラシを作成することもある。地域の産業への理解を深め、視野を広げる機会となるため、生徒には積極的な参加を呼びかけている。進路指導部で英語科の西山敏伸先生は、教科学習への意識づけにもつながる取り組みだと語る。

「生徒が授業で身につけた英語力を活用できるよう、実際に外国人と交流する場を設けたいと考え、本校から観光協会に協力をお願いしました。協会からは快諾が得られ、さらに要望も挙げてもらい、企画が一気に具体化していききました」

16年度には、地域との結びつきをさらに強化し、地域貢献を進めるため、ボランティアを行う部活動「CCC(コミュニティー・コネクショ

ン・クラブ」を設置した（写真2）。生徒全員が所属する部活動として位置づけることで、ボランティア経験の少ない生徒でも気軽に参加しやすくなり、興味のある地域行事を意欲的に手伝うようになったという。

保護者との勉強会により、「受験は団体戦」の意識を醸成

生徒の進路への意識づけを効果的に進めるため、保護者への進路情報の共有も最重要課題として位置づけている。

その中心的な取り組みが、年8〜9回行う「保護者のための進路サポート勉強会」だ。教師と保護者の距離を近づけるため、あえて体育館などではなく、会議室で膝を突き合わせて行う。

写真2 CCCでは、全校生徒が部員となり、全教師が顧問を務める。病院の防災訓練を手伝ったり、児童館や福祉施設の行事に参加して子どもに読み聞かせを行ったりといった多彩な活動を通して、地域貢献を図っている。発足初年度である2016年度には、延べ412人の生徒がボランティア活動に取り組んだ。

また、仕事を持つ保護者も参加しやすくなるよう、時間は19時〜20時30分に設定している。テーマには、大学進学費用（4月）や、大学入試の最新動向（6月）、センター試験の出願（9月）といった一般的な情報のほか、難関大学に合格した卒業生の足跡といった同校独自の情報も盛り込み、保護者の満足度を高められるよう工夫している。また、親子で話し合っしてほしいテーマについては、同日の昼間、同じ講演を生徒向けに行うことも多い。以前は、会場の準備に手間がかかったが、管理職の配慮とPTAの協力によって会場棟の1階に保護者用の下足箱とスリッパを設置し、会議室に椅子150席を常備してからは、教師の負担が大きく減少した。

「保護者からの評判は良好で、繰り返し出席する保護者も目立ち、多い時には学年の40〜50%の保護者が足を運ぶ。校区の中学校の教師が参加することもあり、「面倒見のよい学校」という評価も定着しつつあるという。

「生徒が本当に進みたい道を選ぶためには、保護者の理解と協力が欠かせません。そこで、私たち教師の思いや入試環境の変化を伝える場を定期的に設け、『大学入試は団体戦である』という意識を保護者とも共有したいと考えています」（高橋先生）

「取組みを継続する中で、生徒・保護者の教師に対する信頼感も高まっています。進路決定の場面で、教師のアドバイスに素直に耳を傾ける生徒が増えました。『あの時の先生の一言が背中を押してくれた』と言ってくれる卒業生も多く、教師として大きなやりがいを感じています」（西山先生）

今後は、一般入試での合格者の増加と、さらなる高みを目指す意欲の喚起に向け、指導改善を進めていく。16年度入学生が1年生の時には、旧帝大を始めとする難関国立大学志望者を対象に、各教科・科目の学習の仕方や心構えなどを伝える説明会を行ったところ、38人の生徒が参加した。そうした各学年の新たな取り組みを学校全体で共有し、改善を重ねていく考えだ。

「意志のあるところにこそ、道は開けます。高いと思えるハードルでも積極的に挑戦し、乗り越えようとする気持ちを持つことが、何よりも大切だと思います。今後も、そうした意欲的な生徒の育成に力を入れ、生徒が秘めている無限の可能性を引き出していきたいと考えています」（喜多川先生）

一般入試での合格者の増加を目指し、指導改善を続けていきたい

一連の取り組みによって、将来の志望や大学